

ポスドクに挑戦するか悩んでいるあなたへ

稲葉和樹

はじめに

2年前の3月下旬、私はなんとか学位取得まで漕ぎ着けることができました。これまでの長い苦闘に対するご褒美か、あるいはこれから世界で闘うための片道切符なのか——。何はともあれ無事に博士号を取得し、感動のひとつに浸っていたのも束の間、学位授与式の1週間後には欧州行きの飛行機の中にいました。迷うことなくポスドク留学を決断したものの、いざ初めての海外生活を前にすると期待より緊張が勝ってしまい、当初心の余裕は全くありませんでした。こうしてスタートした、短くも濃密なポスドク期間の経験について、この場を借りてご紹介させていただきます。

ポスドクを考えた経緯

私は慶應義塾大学理工学部応用化学科の卒業研究の際に、戸嶋一敦先生（現・名誉教授）と高橋大介先生（現・教授）の下で、糖質合成およびケミカルバイオロジーを展開する研究室に所属し、学位取得までの6年間研究に没頭しました。当時、当研究室で開発していた有機ホウ素触媒を用いた1,2-*cis*-立体選択的グリコシル化反応（ホウ素媒介アグリコン転移：BMAD反応）に深く魅了され、本手法を用いた天然糖脂質の全合成と新規反応開発に邁進しました。また、恩師や先輩方の厳しくも温かいご指導のおかげで、学会発表や論文出版の機会にも恵まれ、修士課程時には「自立して研究を展開する力を得たい」と博士課程へ進み、博士課程時には「視野を広げ、世界の優秀な研究者と切磋琢磨したい」との想いから、自然な流れでポスドク留学を決意するに至りました。

インターナショナルな研究環境

私がお世話になった留学先は、ドイツの首都ベルリンに隣接するポツダム市にある、マックスプランク・コロイド界面研究所の研究室（Peter H. Seeberger教授）でした。日本人にとっても「ポツダム宣言」の地として馴染み深い街です。首都から電車で1時間ほどの場所に位置するこの街は、低層の建物と豊かな緑に囲まれた長閑な雰囲気をしていました。スーパーや病院、移民局といった公的機関で出会う現地の方々は私の拙いドイツ語にも笑顔で優しく接してくれ、初めての海外生活にして非常に恵まれた環境を選ぶことができたと強く実感しました。

一方で、研究所の周辺は非常に国際的な環境でした。ポツダム大学が隣接していることもあり、日常のコミュニケーションのほぼすべてが英語で行われていました。当時、私の所属した研究室には17ヵ国もの国籍のメンバーが在籍しており、ドイツ人職員の方々も含め英語が堪能でした。また、大学とは異なる研究機関であるため学部生はおらず、少数のインターンを除けば、博士課程の学生が7割、ポスドクが3割という構成でした。「全員が即戦力」という適度な緊張感の中で研究に励む一方、ランチタイムにはキッチンで談笑し、夜は各自プライベートを大事にする、非常にメリハリのある環境でした。

研究所では、夏はBBQ、冬はホームパーティーが頻繁に開催され、同僚たちと親交を深める機会に恵まれました。イベントのたびに同僚のパートナーや家族とも親しくなることができ、人づてに交友関係が広がりました。研究所外でも、秋のオクトーバーフェストや冬のクリスマスマーケットといったドイツならではの催しによく連れ出してもらい、充実した日々を過ごしました。もっとも、当初は密な人付き合いに慣れるまで、結構なエネルギーを要しました。到着早々、教授から「日本人は研究よりもまず英語を学ぶように」と言われたとおり、当初は円滑な意思疎通を図ることに一生懸命でした。ポスドク生活を終えた今なお連絡をとってくれる友人たちが、当時毎回私を誘ってくれたことに非常に感謝しています。

日々の研究生活

日々の研究活動は、今振り返っても非常に満足のいくものでした。語学面では遅れをとったものの、日本で培ってきた研究力が現地でも十分に通用することをすぐに実感しました。私自身、英語は拙くてもしっかりと議論ができる人間だと同僚らに認知してもらってからは、皆優しく接してくれましたし、それからは、一度の会話で正確に意図が伝わるよう、幾分ゆっくり話す習慣を意識するようになっていました。

さらに留学先では、密に情報を共有しながら複数人でプロジェクトを進行させる重要性や、上司に対しても能動的にディスカッションをしにいく姿勢の大切さを再認識しました。卓越した成果を挙げている研究員ほど、この「主体的に問題を解決する姿勢」が明確で刺激を受けました。



2024 年研究所内の複数のラボ間で開催されたミーティングでの集合写真。
P. H. Seeberger 教授（最上段右から 3 人目）と筆者（写真中央やや左）

アレクサンダー・フォン・フンボルト財団

また、留学中に、Seeberger 教授からアレクサンダー・フォン・フンボルト財団（AvH）のフェローシップについて教えていただく機会がありました。AvH はドイツを代表する権威ある研究支援機関の 1 つであり、世界各国の優秀な研究者を支援してきた実績を誇ります。本フェローシップに採択されると、各種ミーティングやドイツ周遊ツアーへの招待をはじめ、配偶者や子供への手厚い家族サポート、ドイツ語語学学校プログラムの受講など、多岐にわたる支援を受けることができます。さらに、フェローシップ期間終了後も同窓生として、生涯にわたりフンボルトコミュニティに参加することができる点も大きな魅力です。

幸いにも、私も本フェローシップに採択され、いくつかのプログラムに参加しました。ドイツ語学校のプログラムでは、多様な国籍のフェローたちと交流を深めつつ、英語でドイツ語を勉強する機会を得ました。また、ミーティングに参加した際は、ドイツ各地で奮闘するほかの日本人フェローの方々とお会いすることができ、異郷の地での苦労や経験を共有することができました。

おわりに：ポストクの意義とは

アカデミアキャリアを目指す場合、往々にしてキャリアの途中で留学経験を求められたりしますが、現地で経験した生の声に触れる機会は多くないため、今回本稿を通じて自身の経験を共有する機会をいただけて嬉しく思います。私のように、学位取得後すぐに海外へ渡る研究者の割合は少なくないものの、多くの方が初めての海外生活となり、少なからず孤独を感じる瞬間もあるかと思います。ただ、想像以上に留学先の文化を学べますし、友人もできます。

何より英語を当たり前に使いこなせるようになります。学費を払って参加する留学やホームステイとは異なり、現地で給料をもらいながら働くポストクは、一研究員として責任をもって仕事に臨む分非常にやりがいがありますし、今後の自分の人生を彩ってくれる「本気を楽しむ感覚」を身につけられる貴重な場だと思います。

そして、私が海外に出て気付いたことは、現地の同僚たちがこれらを良い意味でそこまで深く捉えてはいないということでした。例えば、日本からポストクに臨む女性研究者は依然少数ですが、海外では比較的多い印象を受けました。将来を深く見据えることは重要ですが、考えすぎて挑戦の手を止めてしまうのはもったいないことです。女性同僚の一人は「研究もできて、お給料ももらえて、友人と BBQ してヨーロッパ旅行もできるなんて幸せ」とビール片手に笑顔で語っていました。逞しい。このポジティブなマインドも素直に見習いたいと思わされるものでした。

現在、日々の研究に行き詰まり、将来の進路にも悩む方々に本稿が届き、「自分も挑戦してみようか」と少しでも感じていただけたら幸いです。改めまして、末筆ではございますが、今回このような貴重な執筆の機会をいただきましたことに心より厚く御礼申し上げます。



いなば・かずき
慶應義塾大学理工学部応用化学科 助教
〔経歴〕2024 年慶應義塾大学大学院博士課程修了、博士（工学）。その後ドイツのマックスプランク・コロイド界面研究所にて 2 年間博士研究員として勤務。〔研究分野〕糖質合成化学、ケミカルバイオロジー。〔趣味〕語学学習。
E-mail: kinaba@aplc.keio.ac.jp